

【研究報告】

病院が患者に対して提供している絵本に関する 実態調査と癒し効果を持つ絵本の検討

丸 山（山本）愛 子*

【要 旨】

研究1の目的は、病院においてどのように絵本が利用されているのかを調査することであった。その結果、絵本は様々な理由で利用されており、患者への癒しやストレス軽減を目的として病院において設置されていることも明らかとなった。研究2の目的は、児童が癒される絵本の特徴について検討することであった。児童には1冊の絵本を読んでもらった後、自分の気持ちの変化について評定してもらった。絵本を読んだ後に変化する20項目の気持ちについて因子分析した結果、5つの因子が抽出された。5因子は、「くつろぎ感」、「活性感・充足感」、「抑うつ感」、「爽快感・解放感」、「不安感」と命名された。5因子（絵本を読んだ後の自分の気持ちの変化に関する児童自身の自己認知）と絵本の内容や特徴とは関係していることが示された。子どもの癒しにつながる絵本は、他者に対する思いやりを描いた内容、ユーモアのある内容の絵本であり、また、親しみやすい挿絵の絵本であった。一方、病気や死に関する内容を描いた絵本を読むと、子どもの不安が増すことが明らかとなった。

【キーワード】 絵本, 病院, 癒し

I. はじめに

近年、医療現場における絵本のとらえ方に変化がみられている。これまで、一般的に病院では、低年齢の子どもに医療的な知識を説明する際の補助的道具として絵本を用いること、治療を的確に理解してもらうために治療過程を絵本仕立てで提示する（石川, 前川, 1996; 大池, 2007; 佐久間, 2012; 山岸, 2005; 山田, 2010; 山口他, 2011; 吉田, 2005）ことなどが大半であった。しかし、こうした従来の視点に留まらず、「絵本セラピー」にみられるように、患者への癒し効果をもつ絵本の有効性へも関心が高まりつつある（増田, 2005; 小川, 2008）。

突然の病気や怪我により、医療施設での入院生活を余儀なくされた場合、患者には身体的かつ精神的な負担がかかる。たとえ、生命の存続に直結しない病気や怪我（骨折など）であっても、それまでの生活では体験したことがない様々な制約（身体的拘束など）を受けることが多いため、患者のストレスは増加するといわれている。近年、こうした患者のストレスを軽減するものとして、絵本の読みきかせや絵本読療に関する研究（増田, 2005; 松尾, 2011; 小川, 2008）が徐々に行われ、その有効性が注目されはじめている。

実際、小児患者を外来で受けつけている医療施設では、小児患者の診察までの待ち時間におけるストレスを軽減するために、絵本を待合室に設置することが非常に多い。また、絵本は患者を良好な心理状態に導く（小川, 2008）という理由で、入院病棟に絵本を設置する病院もある。しかし、各医療施設で絵本がどのような目的でどこに設置され、誰が管理しているのか、どのような選定基準で患者へ提供されているのか、など現状を把握できる報告はなされていない。

そこで研究1では、病院における絵本の活用実態について調査した。病院に設置されている絵本に関する調査結果（研究1）は、今後、病院が患者への環境設備を行う（絵本の選定など）際に有益な資料を提供しうるものとなろう。

II-1. 研究1の目的

研究1の目的は、小児患者を対象に治療している病院において、絵本がどのような理由でどのように活用されているか、また、病院内のどこにどういった基準で設置・管理されているのか、誰が利用しており、どのような効果を生んでいるのかなど、詳細な情報を明らかにすることであった。

* 日本赤十字広島看護大学

Ⅱ－２．方法

1). **研究対象** 小児患者を受け入れている A 県内の総合病院 (N= 3) と一般診療所 (N=10) の13カ所に勤務するスタッフとした。病院の選定は、A 県内の3つの市より数カ所ずつランダムに抽出した。本研究で指す病院、総合病院、一般診療所は、厚生労働省の規定に基づいて、医師または歯科医師が医業または歯科医業を行う場所とする。本論文では、医療施設を病院と総称している関係上、それと区別するために、患者200人以上の入院施設と複数の診療課を有する医者が医療を行う施設を総合病院と定義した。患者の入院施設を有しないものか19人以下の入院施設を有する医者が医療を行う施設を一般診療所と定義した。

2). **調査期間** 2012年12月から2013年5月に実施した。

3). **調査手順** 各施設に対して研究概要を説明し、研究協力を依頼した。その後、協力を承諾してくれた病院のスタッフ（主に絵本の管理に携わっている担当者）に約30分のインタビュー調査を行い、記録をとらせてもらった。

4). **調査内容** 以下の11項目について尋ねた。質問内容は、絵本の設置の有無、設置時期、絵本の設置理由、病院内での設置あるいは提供されている場所、整備されている絵本の数、管理の仕方、絵本の利用者と利用者のおよその年齢、絵本の設置に対する患者の反応、絵本の選定方法、選定方法の見直しと頻度、患者とその家族からの意見をどのように把握しているか、である。

5). **データの分析方法** インタビューで得られたデータは、質問項目事に量的あるいは質的な分析を行った。特に絵本の導入理由については、KJ 法によって分類した。なお、データの分類は2名で行った（一致率92%）。

6). **倫理的配慮**：調査協力は日常業務に差し支えない時間に行い、研究協力施設には調査データはすべて匿名で処理することを伝えた。また、データを学会や論文で公表したい旨を説明して承諾を得た。研究倫理審査については、日本赤十字広島看護大学の研究倫理審査委員会でも審査してもらい、承諾を得てから実施した（承認番号1227）。倫理的配慮は、看護者の倫理綱領（平成15年）、看護研究における倫理指針（日本看護協会、平成16年）にも準じた。

Ⅱ－３．結果

小児患者を受け入れている総合病院 (N= 3) と一般診療所 (N=10)、計13カ所に勤務するスタッフ

(看護師7名（うち小児科外来看護師3名）、事務職員5名、図書館司書1名）から以下に示す回答を得ることができた。

1). **絵本の設置の有無**：調査した A 県内13カ所(100%) すべての病院において、病院内に絵本が何らかのかたちで設置されていた。

2). **設置の時期**：設置時期の不明な2カ所の病院を省いた11カ所の病院においては、開院当初より絵本を設置していることが明らかとなった。

3). **絵本の設置理由**：なぜ絵本を病院に設置したのかという質問に関する回答を分類した結果、以下の8つに大別することができた。第一に、絵本は、病気の内容を説明したり、治療過程を小児患者に理解させる際に用いる補助的道具であった。第二に、絵本は、知識の習得・学習を援助する教材道具として、入院のために通学できない小児患者に対して提供されていた。第三に、絵本は、患者の気晴らしやストレスを軽減させるためのものとして、第四に、患者の癒しとなるものとして、診察の待ち時間あるいは閉鎖的で限られた病棟で過ごす際に利用できるものとして設置されていた。第五に、小児患者と病院側の治療スタッフや家族とのコミュニケーションを促進するための媒介物として絵本は活用されていた。第六に、絵本は、患者の遊び道具として提供されていた。第七に、患者の暇つぶしとして、第八に、その他ただ単に患者が退院時に病院に置いていった（寄付を含む）絵本を活用している、他の病院も置いているから、という理由がみられた。

4). **設置・提供されている場所**：絵本の設置場所は、外科系病棟4カ所、内科系病棟3カ所、療養病棟1カ所、外科系外来6カ所、内科系外来9カ所、内科外科系混合の外来1カ所である。外来診察を待つスペースや閉鎖的で限られた病棟空間など、小児患者が出入りする待ち合い用の自由空間に設置されていた。

5). **整備されている絵本の数**：総合病院 (N= 3) では平均約2350冊、小児患者への処置が可能な一般診療所 (N=10) では平均約180冊であった。各病院で正確な数を把握していない場合が多く、ほとんどが「約」により報告された。

6). **管理の仕方について**：絵本を毎月または毎年購入して整理・管理しているスタッフは、医師1名、看護師5名、看護師長1名、看護師（小児科外来担当）2名、事務職員2名、医師の家族（妻）1名、図書専門の担当者1名であった。

7). **絵本の利用者とおよその年齢**：利用対象者を、0歳児～2歳児、3歳児～6歳児、小学校低学年、

小学校中学年，小学校高学年，中学生以上，成人の7つに分類し，その利用頻度を多い順に並べてもらった。絵本を最も多く利用しているようだとスタッフに認知されていたのは，3歳児から6歳児の子どもであり，次に，成人であった。これは，まだ文字を読めない3歳児から6歳児の子どもが，成人（両親や保護者にとって代わる人）に絵本を読み聞かせてもらうためであった。続いて，0歳児～2歳児，小学校低学年，小学校中学年・小学校高学年，中学生以上の順であった。いずれの病院においても一定期間に絵本を利用している人数や年齢についての正確な数値は把握していなかった。

8)．絵本の設置に対する患者の反応：すべての病院において，絵本を利用している患者と家族，病院スタッフの誰もが喜んでいると把握されていた。しかし，どのような内容の絵本が子どもにとって魅力的で，ストレスを軽減して癒しに繋がる絵本であるのかについては，まったく検討されていなかった。

9)．絵本の選定方法と基準：すべての病院において，絵本を管理しているスタッフによって毎月または毎年絵本が選定されていた。選定基準は(複数回答可)多い順に，人気の絵本ランキングや良書推薦の資料を参考にした選定が8カ所，スタッフの独断による選定が7カ所，小児患者とその親の推薦による選定が3カ所，寄贈されたものを利用するが1カ所と，病院ごとに様々であった。

10)．選定方法の見直しと頻度：いずれにおいても見直しはされていなかった。

11)．患者とその家族からの要望や意見の把握：患者と家族からの要望・意見を把握するための対応の有無は，2カ所の一般診療所以外が対応有りと回答した。要望や意見を自由に書ける調査紙と投函箱を絵本コーナーや休憩所に設置して把握しているという対応内容であった。また，3カ所の一般診療所では，定期的にランダムに選定抽出した患者とその家族に直接意見をきいていた。

12)．患者とその家族からの意見の内容：そのほとんどは絵本を読める環境整備に対してポジティブな回答（暇つぶしになる，気分転換になる，ストレス軽減に役立つ，癒される，コミュニケーション促進に役立つ，知識を知れる，病気の理解を促す）であった。ネガティブな回答は，他の患者が保有していた病原菌が絵本を介してうつるのではないかと懸念する意見のみであった。

II-4. 考察

本研究の結果から，多くの病院が絵本を患者に提

供していること，絵本の利用には様々な理由や目的があることも明らかになった。医療スタッフが絵本を利用する理由として，小児患者への病気の内容説明や治療を理解させるのに絵本の活用が有効であるためという本研究の結果は，先行研究の結果（石川，前川，1996；大池，2007；佐久間，2012；山岸，2005；山田，2010；山口他，2011；吉田，2005）と一致するものであった。本研究で新たに明らかになった点は，絵本が小児患者の病気に関する知識習得を目的としているだけでなく，一般的知識の習得や学習の援助教材として有効との考えから病院に設置されていることであった。この結果は，医療関係者が小児患者の退院後をも視野にいれつつ，円滑な社会復帰を援助すべく医療施設の環境整備を行っている実態を示している。

最も注目すべき結果は，大半の病院において，絵本は患者のストレスを軽減させたり癒したりするのに有効であるために導入していると認識されていることであった。その他，絵本が患者個人内により変化を及ぼすだけでなく，絵本を介して患者にとっていい人間関係を構築するのを促進させるからと認知されていたことも重視すべき点であった。限られた空間で他者に迷惑をかけないように静かに過ごす必要のある病院において，他者と楽しく心地よい相互交渉を行うことは困難であり，制約が多い。今後，医療施設で絵本を利用する際，小児患者と家族および医療スタッフとのコミュニケーションを円滑に維持・促進する媒介物としての絵本の効果にもより注目し，検証すべきであろう。

研究1で得たデータ数は13カ所と少なく，一般性を導くにはデータ数が十分ではない。今後より多くのデータを収集して現状を把握することが必要である。

III-1. 研究2の背景

絵本の活用には，多くの利点があるといわれる。研究1において絵本を遊び道具として導入している医療施設もあったように，絵本は我々が幼少から親しんできた対象物であり，遊戯的要素を多大に含んだリラクゼーション効果の高い刺激物でもある（生田，石井，藤本，2013）。また，利用者が時間帯や利用時間の長さを自由に選ぶことができるため，個々人に適したペースで好きな内容を選んで利用することができる。しかしながら，一概に絵本といってもその内容は多種多様であるため，これまでどのような内容の絵本が患者に対してより適切なものであるのか，についてはまったく検討されてこなかった。実

際に研究1でも、絵本の選択への見直しはどの病院においても行われておらず、選択基準となる資料がないため、一般的な推薦図書の情報や医療スタッフの好みによって選ばれているのが現状であった。今後、癒し効果をもつ絵本の内容が明らかにできれば、医療施設の環境整備においても有益な資料を呈することができよう。

Ⅲ－２．研究2の目的

子どもに人気のある絵本を調査し（予備調査1）、一方で、「癒し」がどのように捉えられているのかも明らかにする（予備調査2）なかで調査材料を作成して、その後、児童に絵本を読んでもらい、どのような絵本が児童にとって癒し効果が高いと認知されるかを明らかにすることが、研究2の目的であった。

Ⅲ－３．方法

1)．調査期間：2014年3月から2014年5月に実施した。

2)．研究対象：A県在住の小学生（1～6年生）計約150名に研究への参加協力を呼びかけた。対象としたのは主に、2つの条件を満たしている児童であった。第一の条件は、絵本をひとりで読んで理解でき、かつ、質問紙調査の内容も理解できて、自力で回答できる小学生であることであった。第二の条件は、研究参加に関して、保護者からの参加の承諾が得られていることであった。

3)．調査場所：児童関係のサークルが日頃活動している施設内の落ち着いた読書できる空間で実施した。施設を利用する他の利用者の迷惑にならない場所と時間帯に行った。なお、施設の管理者やスタッフの承諾を得た上で調査した。

4)．調査材料：予備調査1と予備調査2の結果に基づいて選定した絵本とオリジナルに作成した質問を用いた。読書時間については、絵本の文字数、絵本のページ数、個々人の読書ペース、年齢などが異なるため、様々であることが予測された。しかしながら、できる限り小学生への負担を軽減するため2つのことを考慮した。第一に、絵本のページ数の多すぎるものは避け、予備調査1の結果に基づいて児童が15分以内に読めそうな内容量の絵本を書棚に用意した。第二に、質問への回答時間が5～10分以内におさまるよう質問項目を厳選した。

4)－(1)．予備調査1：2013年3月から10月にかけて、市立図書館で貸し出しの多い人気の絵本、インターネットや出版物で紹介されているおすすめ絵

本などのデータをもとに、子どもに人気のある絵本のリスト作りを行った。

4)－(2)．予備調査2：癒しの特徴を抽出するために、成人と小学生を対象にインタビュー調査を行い、癒しと関係する気持ち（5）－(2)を20項目に絞った。

①研究対象：成人12名（年齢範囲は18～50歳）、小学生8名（平均年齢11歳）。

②調査期間：2013年12月から2014年1月に実施した。

③調査内容：これまでの経験のなかで「癒された」と感じたことはあったか、それはどのようなときだったか（状況や対象物）について回答してもらった。この結果と先行研究の結果を参考に、感情変化等に関する質問項目を作成した。

5)．本調査内容：無記名式の質問紙調査により行った。各質問には逆転項目をいれ、項目の順番による効果を避けるため、質問項目の順番をランダムに並び替えたものを5種類用意した。調査項目は以下の3種類の内容から構成された。

5)－(1)．自分の気持ちの変化に関する質問：絵本を読んだ後の自分の気持ちの変化をみるために、絵本を読む前後で以下20種類の気持ちがどれくらい変化したと感じるか（自分の気持ちの変化に対する認知）を尋ね、「1：とても減った」から「6：とても増えた」までの6段階評定で変化の程度を回答してもらった。

5)－(2)．癒しと関連すると考えられる気持ち(20項目)：①のんびりとのどかな気持ち、②ゆったりとおだやかな気持ち、③ほのぼのしたあたたかい気持ち、④ほっとして安心するような気持ち、⑤やさしくなるような気持ち、⑥やわらいだ気持ち、⑦力がわいてくるような気持ち、⑧元気な気持ち、⑨うれしい気持ち、⑩幸せな気持ち、⑪たのしい気持ち、⑫いらいらする気持ち、⑬さびしい気持ち、⑭不安な気持ち、⑮悲しい気持ち、⑯すっきりした気持ち、⑰無になれる・空っぽになれる気持ち、⑱何にもしられない自由な気持ち、⑲いやなことを思い出す気持ち、⑳怖い気持ち、以上の20項目。

これら自己の内面の感情変化に関する項目は、予備調査2の結果と癒しの心的構造を検討した秋元(2003)、「気分調査票」(坂野他, 1994)、「多面的感情状態尺度」(寺崎, 岸本, 古賀, 1992)の研究結果に基づきオリジナルに作成した。

5)－(3)．絵本の特徴に関する質問(3項目)：絵本の特徴に関する質問は、知識を紹介した本、文字や絵の量が多い絵本、生命について考える本の3項目。

5)－(4). 絵本の内容に関する質問 (6項目): 絵本の内容をどのように認知したかを測定するため、絵本の特徴に関する質問を行い評定させた。思いやり・愛他的内容、衝突や問題のない平和な内容、ユーモア溢れる内容、胸に残る感動する内容、自然を描いたゆったりとした内容、涙が出るようなせつない内容。

5)－(5). 絵本への印象・絵本を読んだ感想に関する質問 (5項目): 絵本への印象や感想について測定するため、絵本の内容が好き、絵・写真が好き、自分で何度も読みたい、他の人にもぜひ読んでもらいたい、疲れた、以上5項目。

絵本の特徴に関する質問 (3項目)、絵本の内容の認知に関する質問 (6項目)、絵本への印象・絵本への感想に関する質問 (5項目) 計14の質問は、オリジナルに作成したものである。各質問に対しては、「1:まったくあてはまらない」から「4:とてもあてはまる」までの4段階評定により回答してもらった。

6). 手続き: 児童と保護者への説明と同意: 児童が利用する施設内の一角に研究協力をお願いを掲示し、研究参加に興味を示してくれた対象者に対して研究調査を実施した。まず施設長の許可を得た上で、興味をもってくれた児童に予め研究依頼説明書を配布し、研究内容について口頭でも補足説明を行った。絵本の選定は、ページ数や文字数 (量)、ジャンル別に分類し、可能な限り類似した条件を揃えたものを各ジャンル複数ずつ提供できるように設置致した。

7). データの収集方法と調査用紙の回収方法: 研究に協力する意志のある児童には、いつでも利用できる落ち着いた読書空間を都合のいい時間帯に利用してもらい、設置された絵本から一度も読んだことのない1冊を選んで自由なペースで読んでもらった。その後、無記名式の質問紙調査に回答を記入してもらい、部屋に設置してある調査紙回収箱に投函してもらった。同じ絵本を複数の被験者が読むことを避けるため、絵本を読み終わったら、絵本選定用書棚には戻さず、他の被験者が読むことのできない絵本回収ボックスにいれてもらった。

8). データの分析方法: 量的データについては統計ソフト (SPSS) を使用し、統計学的に処理を行った。

9). 倫理的配慮: 研究概要、目的、方法、安全性、個人情報への守秘に徹してプライバシーを保護すること、研究協力と辞退の任意性、評価とは一切関係ないこと、協力しないことで不利益は一切ないこと、

結果の公表方法、について文書と口頭にて説明し、研究協力への同意を得た。研究対象が未成年の場合には保護者へも依頼書を作成し、保護者と本人からの同意を得た上で調査に協力してもらった。研究倫理については、研究実施前に日本赤十字広島看護大学研究倫理委員会の承諾 (承認番号1329) を得た。

Ⅲ－4. 結果

1). 分析対象者 小学生61名 (男児28名, 女児33名, 平均年齢11歳) から得た質問紙調査を分析対象とした。

2). 自分の気持ちの変化に関する質問: 絵本を読んだ前後の気持ちの変化に関する自己認知 (6段階評定) 20項目について因子分析 (バリマックス回転) を行った結果、5つの因子 (Table 1を参照) が抽出された。

のどかな気持ち、おだやかな気持ち、ほのぼのとした気持ち、安心な気持ち、やさしい気持ち、やわらいだ気持ちの6項目からなる第1因子は、「くつろぎ・安心感」($Mean=3.52, SD=.81$) とした。力がわくような気持ち、元気な気持ち、うれしい気持ち、幸せな気持ち、たのしい気持ちの5項目からなる第2因子は、「活性・充足感」($Mean=3.54, SD=.50$) とした。いらいらする気持ち、さびしい気持ち、不安な気持ち、悲しい気持ちの4項目からなる第3因子は、「抑うつ感」($Mean=3.52, SD=.63$) とした。すっきりした気持ち、無・空っぽになれるような気持ち、何も考えなくていいような気持ち3項目からなる第4因子は、「爽快・解放感」($Mean=3.33, SD=.63$) とした。いやなことを思い出す、怖い気持ちの2項目からなる第5因子は、「不安感」($Mean=1.30, SD=.46$) とした。よって各因子は、第一因子「くつろぎ・安心感」、第二因子「活性・充足感」、第三因子「抑うつ感」、第四因子「爽快・解放感」、第五因子「不安感」とそれぞれに命名された。

3). 自分の気持ちの変化と絵本内容との関係: 癒しに関する自分の気持ちの変化について尋ねた20項目を因子分析した結果、5つの因子が抽出されたため、気持ちの変化について評定した各評定得点から因子ごとに平均値を算出し、その平均値と絵本の特徴や内容について得られた評定得点の平均値 (Table 2参照) との関連について検討した。

相関分析 (Pearson の相関係数を算出、両側検定) を行った結果 (Table 3参照)、癒しに関する5つの因子と絵本の特徴や内容および絵本を読んだ後の感想の間には、多くの相関関係がみられた。

絵本を読んだ前後の気持ちの変化に関わる5つの

Table 1

絵本を読んだ前後での自分の気持ちの変化に関する因子負荷量 (主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法)

	F1	F2	F3	F4	F5	
F1：くつろぎ・安心感 ($\alpha=.83$, $Mean=3.52$, $SD=.81$)						
1. のんびりとのどかな気持ち	.915	-.077	-.050	.175	.043	
2. ゆったりとおだやかな気持ち	.833	-.084	.331	.009	.041	
3. ほのほのしたあたたかい気持ち	.832	-.219	.003	.099	.153	
4. ほっとして安心な気持ち	.788	-.045	.236	.028	.401	
5. やさしくなるような気持ち	.703	.149	.474	.157	.171	
6. やわらいだ気持ち	.407	.200	.744	-.024	-.029	
F2：活性・充足感 ($\alpha=.73$, $Mean=3.54$, $SD=.50$)						
7. 力がわくような気持ち	.148	-.735	-.059	.274	.342	
8. 元気な気持ち	.196	-.356	.476	.614	.015	
9. うれしい気持ち	.040	-.520	-.130	.345	.537	
10. 幸せな気持ち	.299	-.187	-.131	.094	.675	
11. たのしい気持ち	.032	-.254	-.161	.684	.325	
F3：抑うつ感 ($\alpha=.76$, $Mean=1.33$, $SD=.63$)						
12. いらいらする気持ち	-.062	.685	.017	-.019	-.524	
13. さびしい気持ち	.011	.857	.154	-.113	-.015	
14. 不安な気持ち	.051	.788	.107	-.236	.007	
15. 悲しい気持ち	.044	.902	.181	-.030	-.049	
F4：爽快・解放感 ($\alpha=.56$, $Mean=3.33$, $SD=.63$)						
16. すっきりした気持ち	.505	.038	.026	.561	-.022	
17. 無・空っぽになれる気持ち	.350	-.515	.129	.306	.138	
18. 何にもしられない自由な気持ち	.085	-.272	-.548	.438	.046	
F5：不安感 ($\alpha=.70$, $Mean=1.30$, $SD=.46$)						
19. いやなことを思い出す気持ち	.000	.885	.205	.000	-.176	
20. 怖い気持ち	-.027	.621	.120	.139	.463	
因子間相関	F1	1				
	F2	.459**	1			
	F3	.010	-.380**	1		
	F4	.362**	.453**	-.452**	1	
	F5	.015	-.269*	.851**	-.318*	1

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

Table 2

絵本の特徴・内容・絵本への感想別
にみた各評定値の平均値と標準偏差値 (N=61)

	平均値(標準偏差)
絵本の特徴	
授業教材的・知識紹介	1.54 (1.06)
文字や絵の量が多い本	1.15 (.36)
生命について考える本	1.15 (.44)
絵本への印象・感想	
絵本の内容が好き	3.77 (.53)
絵や写真が好き	3.52 (.74)
何度も読みたい本	3.52 (.81)
他人にもすすめたい本	3.79 (.52)
疲れた	1.44 (.90)
絵本の内容	
思いやり・愛他的内容	3.52 (.81)
問題のない平和な内容	3.54 (.50)
ユーモア溢れる内容	3.54 (.50)
自然的なゆったり内容	3.52 (.81)
胸に響く感動的内容	1.30 (.46)
涙が出るせつない内容	1.32 (.63)

因子と絵本の特徴の関係をみると (Table 3), 知識を教える教材的な絵本は「くつろぎ・安心感」($p < .01$) や「活性・充足感」($p < .05$) と負の相関関係にあった。文字や絵の量が多い絵本は「くつろぎ・安心感」, 「活性・充足感」, 「爽快・解放感」($ps < .01$) と負の相関関係にあり, 「不安感」($p < .01$) と正の相関関係にあった。生命について考える絵本は「活性・充足感」($p < .05$) と負の相関関係が, 「抑うつ」, 「不安感」($ps < .01$) と正の相関関係があった。

絵本を読んだ前後の気持ちの変化に関わる 5 つの因子と絵本を読んだ印象の関係をみると (Table 3), 絵本の内容への好感度 (好き) は, 「くつろぎ・安心感」($p < .01$) と正の相関関係にあった。また, 絵や写真への好感度 (好き) は「不安感」や「抑うつ感」($ps < .01$) と負の相関関係にあり, 「活性・充足感」や「爽快・解放感」($ps < .05$) と正の相関

Table 3

絵本の特徴・内容・絵本への感想別にみた児童の絵本を読んだ前後での自分の気持ちの変化に関する相関 (N=61)

	F1 くつろぎ・安心感	F2 活性・充足感	F3 抑うつ感	F4 爽快・解放感	F5 不安感
絵本の特徴					
授業教材的・知識紹介	-.454**	-.152*	-.248	.131	-.231
文字や絵の量が多い本	-.598**	-.450**	.282*	-.380**	.345**
生命について考える本	.063	-.288*	.485**	-.235	.437**
絵本への印象・感想					
絵本の内容が好き	.442**	.224	.131	.231	-.128
絵や写真が好き	.117	.298*	-.268**	.269*	-.509**
何度も読みたい本	.223	.246	.131	.181	-.051
他人にもすすめたい本	.587**	.257*	.167	.167	-.081
疲れた	-.551**	-.352**	-.055	-.084	.041
絵本の内容					
思いやり・愛他的内容	.597**	.224	.037	.117	.111
問題のない平和な内容	.643**	.209	.165	.039	.202
ユーモア溢れる内容	.227	.533**	-.654**	.428**	-.613**
自然的なゆったり内容	.441**	.233	-.348**	.439**	-.354**
胸に響く感動的内容	.310**	-.109	.646**	-.384**	.641**
涙が出るせつない内容	.056	-.459**	.813**	-.488**	.782**

Pearson の相関係数, ** $p < .01$, * $p < .05$

関係にあった。さらに、絵本を読んだ後の疲れは、「くつろぎ・安心感」や「活性・充足感」($ps < .01$)と負の相関関係にあった。他人にも読んでもらいたい絵本は、「くつろぎ・安心感」($p < .01$)や「活性・充足感」($p < .05$)と正の相関関係にあった。

絵本を読む前後の気持ちの変化(5つの因子)と絵本の内容への認知との関係についてみると(Table 3参照)、思いやりや他者への愛に関する内容と平和な内容は、「くつろぎ・安心感」($ps < .01$)と正の相関関係にあった。ユーモアあふれる内容は、「活性・充足感」や「爽快・解放感」($ps < .01$)と正の相関関係にあり、「抑うつ感」や「不安感」($ps < .01$)と負の相関関係にあった。自然を描いたゆったりした内容は、「くつろぎ・安心感」や「爽快・解放感」($ps < .01$)と正の相関関係にあり、「抑うつ感」や「不安感」($ps < .01$)と負の相関関係にあった。胸に響く感動的内容は、「くつろぎ・安心感」、「抑うつ感」、「不安感」($ps < .01$)と正の相関関係にあり、「爽快・解放感」($p < .01$)と負の相関関係にあった。胸がキュンとし涙が出るようなせつない内容は、「活性・充足感」や「爽快・解放感」($ps < .01$)と負の相関関係にあり、「抑うつ感」や「不安感」($ps < .01$)と正の相関関係にあった。

Ⅲ-5. 考察

上記の結果より、思いやりや他者への愛を描いた内容、衝突や問題の生じない平和な内容、自然を描いたゆったりした内容、胸に響く感動的内容の絵本は、児童の「くつろぎ・安心感」に関する気持ちの増加に関係していると考えられる。また、ユーモア溢れる内容の絵本では、児童の「活性・充足感」および「爽快・解放感」に関する気持ちが読む前より増え、「抑うつ感」や「不安感」に関する気持ちが減少することと関係していることが示唆された。さらに、好きな絵本に対しては、児童の「くつろぎ・安心感」が高まり、とりわけ絵や写真が好きな場合には気持ちが楽しくなって活性化すること、好きな絵や内容の絵本は他者にも読んでもらいたいと考えられていることが明らかとなった。これらの研究2の結果から、児童にとって絵本がストレス解消や癒しにつながっており、また他者との交流を深める媒介物となる可能性を秘めているものであると解釈することができよう。

しかし、胸に響く感動的内容や涙が出るようなせつない内容の絵本は、児童の「活性・充足感」に関する気持ちを減らし、「抑うつ感」と「不安感」に関する気持ちを増加させることと関係していることが明らかになった。絵や写真が好きでない絵本で

ある場合、児童の「抑うつ感」や「不安感」と関係していることも示された。児童にとって絵本は、話しの内容だけでなく絵や写真からも多大な影響を受ける刺激物である(秋山, 井上, 1993; 生田, 石井, 藤本, 2013)。そのことを十分に配慮した上で、病院に導入する絵本を選定する必要がある。

知識を教える教材的な絵本では、児童は「くつろぎ・安心感」を高めることができないこと、文字・絵の量が多いと評定された絵本では、「抑うつ感」と「不安感」に関する気持ちが増える可能性が高いことも明らかになった。これらの結果は、自分の病気の知識や治療方法を理解することは、子どもが病気や怪我の治療を行う上で必要以上の恐怖や不安感を抱かせないですむ(大池, 2006)ものの、安心感を得るまでには至っていないことを示唆するものである。その他、上記の結果より、絵本の情報量的な問題も重要であることが示された。

生命について考える絵本の場合、児童は、「活性・充足感」や「爽快・解放感」に関する気持ちは読む前より減る一方、「抑うつ感」や「不安感」に関する気持ちは増えるとの評定と関係していた。中村(2003)は、絵本の死の描写には偏りがあり、大人が子どもに無意識に意識づけている死の描写には子どもに無用な恐怖感を与えているものが多い可能性が高いと指摘している。こうした先行研究および本研究の結果は、病気や死といった生命の問題に関連する内容を扱った絵本の場合には、どのような児童にどういったタイミングや時期で提供するのかを慎重に吟味する必要があることを提示してくれている。生命の問題と関連した悩みを持つ小児患者と家族が多く利用する病院に設置する絵本の内容選定には、死の問題も含む生命に関する問題への繊細な熟慮が必要と考えられる。

以上の結果から、絵本は人の認知に影響を及ぼすものであることが示唆された。健康状態の良好でない小児患者に対して、診察の待合室や閉鎖的で限られた病棟空間において提供できるものは限られている。そうした環境にとって、絵本は、物理的(持ち運び便利・設置が用意)にも、経済的(比較的安価)にも、特徴的(種類が豊富・自由選択が可能)にも適していよう。今後、医療現場でより有効に絵本を活用するために、詳細な情報収集と研究が不可欠である。

IV. 研究1と研究2のまとめと今後の課題

研究1より、病院において絵本は様々な理由で利用されていることが明らかになった。また、研究2

より、絵本を読む前後の自分の気持ちの変化に関する児童自身の自己認知と絵本の内容とは、密接に関係していることが示された。

子どもの癒し(ストレスが軽減されて快適な気分になること)につながる絵本とは、子どもにとって絵が好ましいものであり、思いやりや他者への愛を描いた内容、問題のない平和な内容、ユーモア溢れる内容、自然を描いたゆったりした内容、胸に残る感動的な内容の絵本であることが明らかとなった。本研究の結果より、今後、病院で子どもに対して絵本の環境整備を行う際、絵本の特徴や内容にも考慮しながら絵本選定することが重要であることが示唆された。

今後、データ数を増やして現状をより正確に把握する必要がある。規模の大きな総合病院においては、病院内に図書専門の担当者が常時勤務しており、絵本などの図書類を一括管理している可能性もあることがわかったため、今後、調査対象が特定の地域に偏らないよう配慮し、より多くの地域の規模の異なる病院において調査数を増やすことも課題に加えていく必要がある。

先行研究の結果(藤宮, 2004)から、絵本は子どもだけでなく大人の感情にも影響を及ぼすことが考えられる。絵本が子どもだけでなく、大人にとっても癒しやストレス軽減に役立つものであるのか検討することも今後の課題である。

V. 引用文献

- 秋山和夫監修, 井上共子編著(1993). 保育の絵本研究. 三晃書房
- 藤宮礼子(2004). ルポ「絵本」を大人が読む時代—その出会いと“癒し効果”を考える. 望星, 35(10), 61-67.
- 生田美秋, 石井光恵, 藤本朝巳編著(2013). ベーシック絵本入門. ミネルヴァ書房.
- 石川由美子, 前川久男(1996). 絵本理解とその発達順序—発達援助としての絵本利用の基礎研究—. 心身障害学研究, 20, 83-91.
- 増田梨花(2005). 不登校生徒への絵本の読み合わせの効果から. 精神療法, 35(4), 459-466.
- 松尾直博(2011). 中学生の読書と自己意識の関係: 読書療法の観点から. 東京学芸大学紀要. 総合教育学系, 62(1)n5-213.
- 中村明美(2003). ターミナル期を迎える子どものソーシャルワーク: 日本の絵本における死の描写からの考察. 大阪健康福祉短期大学紀要, 創刊, 52-58.

小川香織 (2008). 絵本の読み聞かせの心理療法的効果の検討ー小児科の診療待ち時間における読書療法的アプローチ. 岩手大学大学院人文社会科学研究科研究紀要, (17), 37-52.

大池真樹 (2006). 手術を体験する幼児への母親の関わり 絵本によるオリエンテーションの母親への影響. 日本小児看護学会誌, 15(2), 61-67.

大池真樹 (2007). 手術を体験する幼児への母親の関わり 絵本によるオリエンテーションの母親への影響. 宮城大学看護学部紀要, 10(1), 9-15.

坂野雄二, 福井知美, 熊野宏昭, 堀江はるみ, 川原健資, 山本晴義, 野村忍, 末松弘 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討. 心身医学, 34, 629-636.

佐久間知花 (2012). 小児の術前訪問の改善(第2報) プレパレーション導入による不安の軽減の効果. 日本手術医学会誌, 33(2), 193-196.

寺崎正治, 岸本陽一, 古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.

山岸敏身 (2005). 絵本を使ったCAPD導入の準備. 日本小児腎臓病学会雑誌, 18(1), 53-54.

山口求, 光盛友美, 今村美幸, 黒杭奈留美, 室脇千

里, 重松静香, 水本理恵子, 藤原治香 (2011). 乳幼児の小児看護におけるプリパレーションのレジリエンス効果. 広島国際大学看護学ジャーナル, 8(1), 13-25.

山田咲樹子 (2010). 健康障害をもつ子どものきょうだいへの看護アプローチ 絵本による説明への反応から. 日本小児看護学会誌 19(1), 65-72.

吉田広美 (2005). 手術を受ける幼児・学童期の子どものプレパレーションに関する文献検討. 京都市立看護短期大学紀要, 30, 121-129.

VI 謝 辞

本研究を実施するにあたり, 快く御協力くださいました医療機関の関係者の皆様, 児童および施設の関係スタッフの皆様に深謝申し上げます。本研究は, 日本赤十字広島看護大学平成23, 24年度奨励研究費の助成を受けて行いました。ここに記して, 心より御礼申し上げます。なお, 研究1の成果は, 2014年10月に日本心理学会第78回大会において, 研究2の成果は, 2015年3月に日本発達心理学会第26回大会(予定)において発表いたしました。

A survey on the picture books that hospitals offer to patients and an examination into the characteristics of picture books with healing effects

Aiko (YAMAMOTO) MARUYAMA*

Abstract:

This study investigates how picture books are used in hospitals in Japan and examines the characteristics of the picture books that are used to heal children. The study revealed that picture books are used for various reasons, but primarily for the purpose of healing and relieving the stress of young patients. 61 Japanese children (mean=11 years old, about equal numbers of boys and girls) were interviewed to determine their feelings after reading one picture book. As a result of conducting a factor analysis, five factors were identified covering about 20 feelings experienced after reading the books. The five factors were classified as feelings of (i) relaxation, (ii) revitalization, (iii) sadness, loneliness or depression (iv) acceptance, clarity, contentment and (v) fear or anxiety. It was shown that the five factors on the child's self-cognition regarding changes in his or her own feeling after reading a picture book are related to the content and characteristics of the picture book. It was proved that stories of caring for others, or humorous stories created a healing effect. It also became clear that books with attractive illustrations enhanced the positive feelings felt by Japanese children, whereas stories related to illness or death increased feelings of anxiety and depression.

Keywords:

picture book, hospital, healing

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing